

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 9 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23360273

研究課題名(和文)カンパニータウンの成立過程と空間構成に関する国際比較研究

研究課題名(英文)International Comparative Study on formation process and the spatial composition of Company Town

研究代表者

池上 重康 (IKEGAMI, Shigeyasu)

北海道大学・工学(系)研究科(研究院)・助教

研究者番号：30232169

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 15,000,000円

研究成果の概要(和文)：カンパニータウンは、狭義には19世紀半ばから1930年までに計画されたものを指し、1880年代以前に事業者のパターナリズムの下、インダストリアル・ランドスケープを形成した第1期、福利資本主義の思想が根底にあるモデル・タウンと称される第2期、計画家が開与し、田園都市運動が大きく影響した第3期に分けられる。イギリスと日本では衛生的見地から禁止された棟割の労働者住宅が、ヨーロッパ大陸では禁止されず、現在では産業衰退地域への新産業誘致と産業遺産の価値付けを複合させ、公営住宅として再生する取り組みがみられた。また、近代初頭の欧米諸国の労働者住宅地では「菜園」を中心に外部環境のデザインに多様性が見られた。

研究成果の概要(英文)：Company Town is defined as a town that had been planned between the mid-19th century and 1930, and can be divided into three phases. The first phase is before the 1880s, when the industrial landscape was formed under the paternalism. The second phase is called as "Model Town," underlying the concept of welfare capitalism. In the third phase, many towns were designed by planners, and had been greatly affected by the garden city movement. Though the back-to-back workers housing had been banned from hygienic point of view in United Kingdom and Japan, they are not prohibited in the European continent. Recently, by combining the new industrial attract with the value of industrial heritage to the industrial decline districts, those dwellings are renovated as public housing. In addition, we could ascertain diversity in the design of the external environment with a focus on the "garden" in the workers residential area of Western countries in the early modern era .

研究分野：近代建築・都市史

キーワード：社宅街 カンパニータウン 都市構造 労働者住宅 田園都市 田園郊外 菜園 都市形成史

1. 研究開始当初の背景

本研究の標題に掲げる「カンパニータウン」とは、ガーナーGarner, John S. 編著の *The Company Town*, 1992 を通して、欧米では広く知られるようになった言葉であり、現在では世界遺産の一分類としても位置づけられている。カンパニータウンは「一企業の経済的支援に依拠した居住区で、不動産、建物（居住および商業の両側面）、各種ユーティリティ、病院、小規模な食品販売、ガス供給、および余暇施設により構成される」と英語圏の辞書では定義されている。翻って日本では、企業の経営による居住区は主に住宅ストックに乏しい地方都市で進展を見せ、上記した「カンパニータウン」に類似する「社宅街」を形成した。しかし欧米の事例を日本のそれに単純にアナロジーすることはできない。

2. 研究の目的

そもそも欧米における広義の「カンパニータウン」は、水力を動力としたミルタウン Mill Town、慈善家あるいは博愛主義者によるインダストリアル・モデル・ヴィレッジ Industrial Model Village、一企業の経営によるカンパニータウン Company Town、複数企業が一都市に複合的に混在するコーポレートタウン Corporate Town の4つに分類されているが、これはアメリカを主体とする産業構造の下に定義したものであって、国際比較するにあたり、単純に日本あるいはヨーロッパのそれにアナロジーすることは容易ではなく、再定義が必要である。

そこで、まず日本（旧植民地を含む）における鉱工業系企業社宅街を業種別に開発年代、敷地形状、風土的条件、開発母体の観点から整理分類し、これと並行して、欧米におけるカンパニータウンの事例報告を収集し、同様の観点から整理分類する。この整理分類を通して、日本の「社宅街」と欧米の「カンパニータウン」の相違、あるいは同時代的、同一業種の類似性を読み解き、カンパニータウンの成立過程と空間構成の国際比較を行うことを目的とした。

3. 研究の方法

平成23年度は、旧植民地（植民的支配地）である樺太・台湾の製糖工場、満州の炭鉱ならびに製鉄工場における社宅街のフィールド・サーヴェイと資料収集を行った。また、翌年度にフィールド・サーヴェイを予定していたアメリカのカンパニータウンの形成に関する文献を収集し、調査計画を策定した。参考とした主な文献は以下の通り。

・Garner, John S., *The Company Town*, Oxford University Press, 1992

・Crawford, Margaret, *Building the Workingman's Paradise, the Design of American Company Towns*, Verso, 1995

・Green, Hardy, *The Company Town, the*

Industrial Edens and Satanic Mills that Shaped the American Economy, Basic Books, 2010

平成24年度は、前年度に策定した計画を基に特徴的と思われるアメリカのカンパニータウン9カ所の視察を行うとともに、翌年度に視察を計画していたイギリスの鉱工業系企業の労働者住宅地ならびに田園郊外に関する文献を収集し、調査計画を策定した。主な参考文献は以下の通り。

・月尾嘉男、北原理雄、実現されたユートピア、鹿島出版会、1980

・Ray Taylor, Margaret Cox, and Ian Dickins eds., *Britain's Planning Heritage*, C. Helm, 1975

・Darley, Gillian, *Villages of Vision*, Five Leaves Publications, 2007

・Coates, Chris, *Utopia Britannica, British Utopian Experiments: 1325-1945*, Diggers & Dreamers Publications, 2001

平成25年度は、文献調査により抽出したイギリス国内の鉱工業企業による住宅地経営の特徴的な事例11カ所の現地視察を行った。併せて、翌年度に視察予定のフランスとドイツの調査対象地を文献調査により選定した。主な参考文献は以下の通り。

・Stern, Robert A. M. ed., *Paradise Planned, the Garden Suburb and the Modern City*, The Monacelli Press, 2013

・Borges, J. Borges & Torres, Susana B. eds., *Company Towns, Labor, Space, and Power Relations across Time and Continents*, Palgrave Macmillan, 2012

・Tranchant, Marie, *Le bassin minier, entre ciel et terre, Patrimoine du Nord-Pas-de-Calais*, Ouest-France, 2013

・Wohn- und Arbeitersiedlungen im Rheinland, *Eine Zwischenbilanz aus denkmalpflegerischer Sicht*, Wernersche Verlagsgesellschaft, 2006

平成26年度は、イギリス（イングランド、ウェールズ）の追加調査を行うと共に、イタリア1カ所、フランス9カ所（うち2カ所はノール＝パ・ドゥ・カレー地方とムルト＝エ＝モゼル地方）、ベルギー2カ所、ドイツはルール工業地帯を重点的に17カ所の現地視察を行った。

主なフィールド・サーヴェイ地（基幹産業）を以下に示す。

中国：撫順（炭鉱）、本溪湖（製鉄）、鞍山（製鉄）

アメリカ：ブルマン（客車製造）、ロウエル（織物工業）、インディアン・ヒル（機械工具工場）、ホワイティンズヴィル（紡績）、ホープデール（織物工業）、スレーターズヴィル（織物工業）、キングスポート（複合工業）、チョコピー（製薬）、アホ（銅鉱山）

イギリス：ニュー・ラナーク（綿工場）、ブレナヴォン（炭鉱・製鉄）、コープレイ（紡績）、ソルティア（毛織）、アクロイドン（毛

織) ポートサンライト(石炭工場) ニュー・イヤーズウィック(チョコレート工場) ポンティウォーン(炭鉱・製鉄) エブ・ヴェール(炭鉱・製鉄) ムーアエンズ(炭鉱) イタリア: クレスピ・ダッダ(綿紡績) フランス: ボワ・デュ・ヴェルヌ(工業) ル・クルーズ(鉱業・製鉄) アルケスナン(製塩) ミュールーズ(織物工業) ムニエ(チョコレート工場) シテ・ナポレオン(都市労働者住宅) ノール=パ・ドゥ・カレー地方(炭鉱) ファミリステール(鑄造) ムルト=エ=モゼル地方(鉄鋼) ベルギー: ル・グラン・オルニュ(炭鉱) ボア=デュ=ルク鉱区(炭鉱) ドイツ: マルガレーテンヘーエ(田園郊外) ジートルンク・アルテンホフ(製鉄・製鋼) テオバルトシュトラッセ(炭鉱) コロニー・ツォルフェアアイン(炭鉱) アルテ・コロニー・エヴィング(炭鉱) ダールハウザー・ハイデ(製鉄・製鋼) シュタールハウゼン(鉄鋼・炭鉱) グリュックアオフジートルンク(炭鉱) ヒュッテンジートルンク・アイゼンハイム(鉄鋼・炭鉱) アム・グラフェンブッシュ(鉄鋼・製錬) シュテマースベルク(炭鉱) マルガレーテンジートルンク(製鉄・製鋼) ペアムテンジートルンク・プリアースハイム(製鉄・製鋼) ヘラウ田園都市(工芸) AEG ジートルンク・ヘンニヒスフォルフ(電気機器製造) ジーメンシュタット(電気機器製造)

4. 研究成果

(1) 旧植民地

撫順炭礦においては、東京都公文書館内田文庫所蔵の南満洲鉄道株式会社が、大正2年に作成(原案は明治42年作成)した社宅の設計図面・仕様書集を発見し、大連と撫順で共通に建築された社宅の設計者が弓削鹿治郎であることがわかった。弓削は当時撫順炭礦勤務であり、これまで西澤泰彦博士が推察してきた「大連の社宅を撫順に準用」したのではなく、撫順において設計したものを大連に援用したことが明らかとなった。

また、鞍山の南台町に役員社宅および倶楽部がほぼ全棟現存していることを確認した。今後、配置図、平面図の採集など再調査が必要であり、満鉄社宅に関する既往研究との比較考察が求められる。

(2) アメリカ

米国におけるカンパニータウンは、狭義には19世紀半ばから1930年の大恐慌までに計画されたものであることを指し、大きく3期に分けられる。第1期は1880年代の不況以前であり、事業者のパターナリズムの下、都市計画家や建築家の関与しないインダストリアル・ランドスケープを形成した。第2期は19世紀後半から20世紀初頭にかけてのモデル・タウンと称される時期で、プルマンに代表される福利資本主義の思想が根底にあ

る。第3期は第一次世界大戦後で、計画家の関与があり、田園都市や都市美運動がカンパニータウンの形成に大きく影響した。

(3) イギリス

アメリカにおけるカンパニータウンでは、企業が社員の住宅地経営を全般に行っており、経営的視点から見ると日本の社宅経営に類似するものがあったが、イギリスでは、基本的に住宅の建設はギルド(組合)により行われており、企業が関与せずむしる地方行政の干渉を受けることが大半である。また、会社が土地の提供を行うことが多く、ほとんどが「99年契約」により貸与された。この99年の年限を過ぎた住宅地は、母体企業が現在まで存続していないものが大半で、企業住宅地から一郊外住宅地として継承されているものが目立つ。労働者住宅については、産業革命以後、企業により提供されていた時期もあったが、20世紀初頭に田園都市運動のブームとともに住宅改良が進められた事例もある。

本研究での調査で得られた特筆すべき事例はエブ・ヴェールである。王立都市計画協会による都市遺産リストにも漏れていた「田園郊外」計画や、田園都市運動に呼応した労働者住宅の改良事例が多く見られた。同社に雇用された建築家ワルター・ロッサーによる2つの田園郊外計画(ポンティウォーン、ヴィクトリア)についてエブヴェール工場博物館所蔵資料を基礎資料として詳細に調査・考察を加えた。

(4) フランス・ドイツ

イギリスでは1890年、日本では1930年に衛生的見地から法律で禁止された棟割(back-to-back)の労働者住宅が、フランス、ドイツでは禁止されず、現在では産業衰退地域への新産業誘致と産業遺産の価値付けを複合させ、公営住宅として再生し移入人口を受け入れる取り組みがみられた。また、近代初頭の欧米諸国(特にフランス・ドイツ)の労働者住宅地では「菜園」を中心に外部環境のデザインに多様性があることを確認した。一方で、田園都市・田園郊外運動の影響を受けた事例では、住宅地の外部環境デザインが画一化される傾向も確認した。

フランス・ベルギー・ドイツでは視察した大半の労働者住宅が平地あるは緩斜面に建設されているが、一部溪谷に建設された住宅は正面が二階建て、背面が傾斜地の影響より2階からアクセスする“Welsh Style”と呼ばれ、地理的類似性が住宅計画にも影響を与えることが確認できた。

(5) 総括

本研究を通して、社宅街、カンパニータウン、労働者住宅について、新たな研究課題が浮き彫りとなった。

既成概念として、20世紀初頭の田園都市運

動が、労働者住宅地の形成、デザインに影響を与えたと言われてきたが、田園都市論発表以前に労働者住宅地では、田園（あるいは菜園）を包括した住環境を整えていた。この観点から改めて日本の社宅街における菜園の状況を再考すれば、同時代的な住環境の形成に対する普遍的な視座を得ることができるであろう。

19世紀のアメリカやイギリスで多くみられた水力を動力源とするいわゆるミル・タウンは、今回、視察できたフランス・ドイツでは類例をほぼ見ることができなかつた。もちろん日本にも類例はない。主に繊維産業に見られるこの類型は、産業革命発祥の地であるイギリスと、次代を担ったアメリカにおいて隆盛を誇った。業態が住宅地の地理的条件にも与えた典型例の一つである。

フランス・ベルギー・ドイツの炭鉱は平地にあり、必然的に労働者住宅地は坑口に近い平地に形成される。日本では九州の産炭地がそれであり、撫順炭鉱もそれに分類される。一方で、ウェールズは山岳炭鉱であり、北海道の石狩炭田と同型の地理的条件を有する。今後、炭鉱に限定して、地理的条件を鑑みた住宅地形成の比較検討を新たな研究課題として指摘できる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 6 件)

辻原 万規彦、角 哲、今村 仁美、旧樺太製糖株式会社豊原工場に関連する建築物の図面と現況にみる特徴-旧明治製糖株式会社土別工場との比較を通じて-、日本建築学会技術報告集、査読有、47 巻、2015、pp. 849-854

井上 亮、晏 宏偉、下岡 幸也、高橋 奎伊、中里 倫征、三宅 潤、中野 茂夫、海外における住宅地計画と設計手法、日本建築学会中国支部研究報告集、査読無、Vol. 38、2015、pp. 未定

横川 陽香、中江 研、明治・大正期の田園都市思想の受容過程に関する研究 高等教育機関の蔵書を中心として、日本建築学会近畿支部研究報告集、査読無、Vol. 55、2015、pp. 未定

中江 研、角 矢 洋平、西島 萌花、日本毛織(株)加古川工場・印南工場における明治末期から大正期の社宅の建設過程について 日本毛織(株)の社宅街 その 1、日本建築学会計画系論文集、査読有、701 号、2014、pp. 1663-1672

平井 直樹、池上 重康、中江 研、石田 潤一郎、明治後期から昭和初期における職工住宅改善の試み -宇野利右衛門の著述に基づく労働者居住施設の歴史的考察 その 2-、日本建築学会計画系論文集、査読有、692 号、2013、pp. 2223-2232

平井 直樹、石田 潤一郎、池上 重康、明治後期から昭和初期における職工寄宿舍に関する評価 -宇野利右衛門の著述に基づく労働者居住施設の歴史的考察 その 1-、日本建築学会計画系論文集、査読有、689 号、2013、pp. 689-698

〔学会発表〕(計 5 件)

池上 重康、小山 雄資、エプヴェール製鋼石炭会社のポンティウオーン田園郊外について、日本建築学会大会(関東)学術講演、2015 年 9 月 6 日、東海大学(神奈川県・平塚市)

池上 重康、小山 雄資、中江 研、中野 茂夫、エプヴェール製鋼石炭会社のヴィクトリア田園都市について、日本建築学会大会(近畿)学術講演、2014 年 9 月 14 日、神戸大学(兵庫県・神戸市)

中江 研、山本 一貴、ペーレンスとデ・フリースの労働者用ジードルンク計画の理念と方法について：ペーター・ペーレンス、ハインリヒ・デ・フリース共著『俟約建設について』に関する研究(その 1)、日本建築学会大会(北海道)学術講演、2013 年 9 月 1 日、北海道大学(北海道・札幌市)

角 哲、池上 重康、砂本 文彦、谷村 仰、中江 研、中野 茂夫、南満洲鉄道株式会社撫順炭礦千金寨新市街の福利施設、日本建築学会大会(東海)学術講演、2012 年 9 月 13 日、名古屋大学(愛知県・名古屋市)

池上 重康、角 哲、砂本 文彦、谷村 仰、中江 研、中野 茂夫、南満洲鉄道株式会社撫順炭礦千金寨新市街の形成、日本建築学会大会(東海)学術講演、2012 年 9 月 13 日、名古屋大学(愛知県・名古屋市)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

池上 重康 (IKEGAMI, Shigeyasu)

北海道大学・大学院工学研究科・助教

研究者番号：3 0 2 3 2 1 6 9

(2) 研究分担者

中野 茂夫 (NAKANO, Shigeo)

島根大学・大学院総合理工学研究科・准教授

研究者番号：0 0 3 9 6 6 0 7

中江 研 (NAKAE, Ken)

神戸大学・大学院工学研究科・准教授

研究者番号： 4 0 3 2 4 9 3 3

辻原 万規彦 (TSUJIHARA, Makihiko)
熊本県立大学・環境共生学部・准教授
研究者番号： 4 0 3 2 6 4 9 2

砂本 文彦 (SUNAMOTO, Fumihiko)
広島国際大学・工学部・准教授
研究者番号： 7 0 2 9 9 3 7 9

木方 十根 (KIKATA, Junne)
鹿児島大学・大学院理工学研究科・教授
研究者番号： 5 0 2 7 3 2 8 0
(平成 25 年度は連携研究者)

小山 雄資 (KOYAMA, Yuusuke)
鹿児島大学・大学院理工学研究科・助教
研究者番号： 8 0 5 2 9 8 2 6
(平成 26 年度は連携研究者)

角 哲 (KAKU, Satoru)
北海道大学・大学院工学研究院・助教
研究者番号： 9 0 4 5 5 1 0 5

崎山 俊雄 (SAKIYAMA, Toshio)
秋田県立大学・システム科学技術学部・准教授
研究者番号： 5 0 3 8 1 3 3 0
(平成 25 年度より連携研究者)

谷村 仰仕 (TANIMURA, Takashi)
広島国際大学・工学部・講師
研究者番号： 0 0 3 6 8 8 1 2
(平成 25 年度より連携研究者)

(3)連携研究者

安野 彰 (YASUNO, Akira)
文化学園大学・造形学部・准教授
研究者番号： 3 0 3 3 9 4 9 4